

フランス語質問箱

文法上の性の話

藤村逸子

Q: フランスで昨秋また、職業や肩書を表す名詞の文法上の性の問題が社会的な話題になったようですね。2014 年 10 月の新聞で読んだのですが、国民議会で保守系の男の代議員が社会党の女の議長に“Madame le président”と呼びかけて騒ぎになったとか。国民議会では女の議長や代議員は la présidente, la députée と女性名詞で呼ぶ規則があり、それに違反したせいで件の代議員は 1378 ユーロの減給処分になったそうです。一方、アカデミー・フランセーズは、その 1 週間後にはウェブサイトで le président の使用を支持する宣言を発表して、国民議会に抗議しています。

すでに 15 年以上も前の 1999 年に、当時の社会党政府が言語学者の協力を得て、人間を表す名詞の文法的性と人間の生物学的な性を一致させる方向の指針を発表し、公文書ではそれが実現し、この問題はすでに決着のついた話かと思ってたのですが違うのでしょうか。

A: なかなか一気に解決しないようですね。この話が話題になるときにはいつも権力闘争のようになります。男と女の間の争いではなくて、フランス語を誰が牛耳るのかという争いです。アカデミー・フランセーズはこの 10 月の宣言の中でも、「フランス語の番人 (gardienne, Académie が女性名詞のため)」を自認して、議会や政府などの公権力がフランス語に介入するのに異議を唱えています。法務省は「法の番人」ですが。

Q: フランス語には番人がいて、間違いをチェックするということでしょうか。フランス人のインフォーマントにフランス語の使い方について尋ねると、フランス語には規則書があり、使用のルールはそこに書いてあるのでそれを見るといいというようなことを言われます。そのたびに驚くのですが、そのルーツはこれでしょうか。

A: そうだと思います。特に名詞の性は勝手に変えてはいけないと認識されています。日本人が漢字の間違いは恥ずかしいと思うように、名詞の性を間違えるのは恥ずかしいことのようにです。

Q: それはつまり、名詞の性は自然に身につくものではなくて学習すべき事だからでしょうか。

A: le がつくか la がつくか, un がつくか une がつくかは、母語話者なら大抵の語は使っているうちに身につくので意識的な努力は必要ないでしょう。ただ、指示対象の自然の性に従うというような一般的ルールではなくて、名詞ごとに一つずつ修得するというのがポイントです。15年前に女の大臣に関して、le ministre を la ministre に変えるのが簡単でなかったのは、男性名詞として使用されている語の文法上の性を使用者が自由に変更することはできないからなんです。1985年には女の軍人（大尉）の妊娠という出来事があり、それを報じた “Le capitaine Prieur est actuellement enceinte.” という文の奇妙さが話題になりました。le を la に置き換えるだけで問題は簡単に解決すると思うのに、capitaine が男性名詞として規定されている限りそうはなりません。人間を表す場合、結果的には男には男性名詞、女には女性名詞を使うのが大多数なのですが、名詞の文法上の性を決めているのは個々の名詞であり、指示対象の性ではないのです。

Q: つまり、名詞の性は恣意的なものということでしょうか。

A: 名詞のほとんどは無生物名詞です。人間名詞は割合としてはほんのわずかです。人間名詞の文法上の性の90%に生物的な性による動機付けがあるとすると、圧倒的多数の無生物名詞と残りの10%の人間名詞にはこの意味での動機付けはありません。

Q: 音声面の動機付けはあるんですね。-tion で終わると女性名詞で、-age で終わると男性名詞というような形態面の動機付けもありますよね。/ã/ で終わる名詞は99%以上、/ẽ/で終わる名詞は98%以上が男性名詞だと Lyster, R.(2006)で読みました。

A: -tion や-age は確かに規則的です。でも音声や形態によって決まってるという実感は本当にありますか？

Q: うーん。どうでしょう。

A: たとえば、/ẽ/で終わる名詞は98%が男性名詞といますが、女性名詞の main や fin をすぐに思いつきます。-ence で終わる名詞を挙げると、science, conscience, intelligence は女性名詞ですが silence は男性名詞です。bois, fois, mois の中では bois と mois は男性名詞で、fois が女性名詞です。face, place, grâce, pièce, justice, service の中ではどうでしょうか？

Q: service だけが un service なので男性名詞ですね。しかし、何事にも例外

というのはあるので文句を言っても仕方がないのでは。

A: 例外が使用頻度の低い単語ならば問題はありません。高頻度の語は極端に頻繁に使用されるという特徴がある上に、例外項目となりやすいので言語全体の規則性にとって大きな攪乱要因になります。[une ...ence]のような枠構造で、名詞の性と音声や形態素との結びつきが修得できるかどうかは、その規則性にかかっています。高頻度の例外があると邪魔してしまいます。その結果、音や語形に基づいて修得することが困難になります。意識的に、-ence で終わる名詞はほとんどは女性だけれど *silence* は男性だとか、*liberté* などの -té で終わる語は大抵は女性だけれど、*côté* と *comité* と *traité* は男性なので気をつけなければならないなど、結局一つずつの単語別の記憶が必要になるのです。

Q: なるほど、フランス人の頭の中では、名詞の性は一つずつ覚えなければならぬ言語の規則なんですね。

A: そうです。それに、文法上の性によって語の意味が変わるものも数限りなくあります。le tour du monde と la tour Eiffel, un mémoire と une mémoire, un poste と une poste などはおなじみですが、la politique (政治) と le politique (政治に関すること) の使い分けというようなのもあります。

Q: 意味が変わるのだから文法上の性を間違えなければいけないってことですね。le secrétaire は国務大臣なのに対して la secrétaire は秘書だったり、un couturier はファッションデザイナーなのに対して une couturière は縫製士だったりしたのもこれが理由でしょうか。

A: はい。この通りだったらまだよいですが、ここに指示対象の性が絡んでくるので話はさらにややこしくなります。1999年以前は le secrétaire は男女の国務大臣と男の秘書で、la secrétaire は女の秘書でした。un couturier は男女のファッションデザイナーと男の縫製士で、une couturière は女の縫製士でした。構造を見ると、地位があがると女は男にならねばならないみたいで女に失礼じゃないですか。文法上の性は意味の違いに対応するから勝手に変えてはならないなどと言ってないで、人間名詞の場合には指示対象の性に合わせるほうがハッピーです。

Q: それにその方が断然わかりやすいですね。

A: でも、問題はまだいろいろあるんです。たとえば *membre* という語の場合、これはもともと無生物名詞の「手足」という意味しかなかったところ、16世紀に、「構成員、メンバー」という人間名詞の用法が生まれました。chef ははもっと古くて、体の一部の「頭」の意味が元ですが12世

紀に人間の「チーフ，シェフ」の意味が生まれました．無生物名詞から人間名詞への変化は，**personne**（ラテン語では「仮面」）を始め枚挙に暇が無いですが，特にフランス語では番人たるアカデミーの保守性の故に，人間を指す場合にも元の単語の性がそのまま維持される傾向が強いです．名詞の性を指示対象の性に一致させる計画もこんなわけで一気に進まないのです．

Q：文法的性を持つ言語はフランス語だけではないですが，他の言語にも同じような問題があるのでしょうか．

A：ヨーロッパの言語は英語などの2，3の言語を除いて文法的性があります．状況はそれぞれ違うようですが，1999年当時「フランス語は職業名詞の女性化が話題になる最後の国」と自嘲的に言われたぐらいで，問題が複雑なのは確かです．スペイン語だとずっと規則的で簡単です．スペイン語は，発音や語形による動機付けがフランス語より強く，大雑把に言って-aで終わると女性名詞，-oで終わると男性名詞です．人間名詞の場合には，指示対象の性による動機付けが機能して，大臣だと **ministro, ministra**，メンバーだと **miembro, miembro** のような語形が自動的に作られます．権力が作らなくても女性名詞がひとりだけでできていくのは，人々が名詞の性は恣意的ではないと思っているからでしょう．

Q：フランス語の名詞の性は語形との関係も深くはなく，指示対象の性との関係も確かではなく，場合によっては名詞の意味の区別に役立っているということのようですが，言語記号として性能が低いのではないのでしょうか．修得も困難だし社会的な問題もあるので，そんなのはなくてよいのではと思いますが，どうでしょうか．

A：機能性が低く放っておくとなくなりそうだからこそ，アカデミーが熱心に護ろうとしていると感じます．フランス語は語尾が脱落して名詞の性の語形を失ってしまいました．英語にも昔は名詞の性がありましたが，古英語から中英語に移る過程でなくなりました．ノルマン・コンクエストに匹敵するような大きな社会政治的変動が起これば，フランス語から名詞の性が消えても不思議はないでしょうが，，，

Q：最後に素朴な質問ですが，無生物名詞の場合，名詞の文法上の性がその名詞に男と女に関連する付随的意味を追加することはあるのでしょうか？**la chaise** は女らしいイメージ，**le livre** は男らしいイメージを伴うことがあるかという質問です．

A：イメージと言われると答えにくいですが，擬人化するとき女性名詞は女に，男性名詞は男になるのは確かです．おとぎ話では **le soleil** は男，

la lune は女になります。次は *Le Monde* からの例です。抽象名詞でも、女性名詞は「おばあさん」、男性名詞は「おじいさん」に擬人化されています。Le cinéma français « est un vieux monsieur qui est en train de mourir » (2000), La Juventus est une vieille dame qui n'a pas toujours que de bonnes manières (1996), Radio-France est une vieille dame qui n'aime pas être bousculée (1996), L'unique prison encore existante à Paris, construite en 1867, est une vieille dame, qu'aucun remède ne semble pouvoir guérir de l'usure du temps (2000), La carte Famille nombreuse est une vieille dame née dans l'entre-deux-guerres (2006).

Q : 無生物名詞も、その文法上の性に応じた自然の性を意味内容として持つことがありますよね。

A : フランス語ではこういうことが起こりますが、スペイン語ではこういうのはなく、逆に無生物名詞の比喩的用法において、指示する人間の性に応じて名詞の性が変化する場合があります。フランス語の *merde* にあたる *mierda* は女性名詞ですが、男に対して用いると男性の冠詞がついて *Eres un mierda* (このくそ野郎) となるそうです。

Q : 最初に戻って、1999年の政府の指針は今後どうなっていくのでしょうか？

A : 明らかに人間を示す職業や肩書名詞の場合、人間の自然性と文法上の性の一致は進んで行くでしょう。最初は違和感のある冠詞と名詞（と語形）の組み合わせも、使うほどに慣用として定着します。たとえば、*une chercheuse* はそうです。当初、女の研究者を指してこの語を使うのは嫌がられました。「知りたがり屋」というような意味が存在していたからですが、今では研究者の意味で普通に使われています。

1791年にすでに *Déclaration des droits de la femme et de la citoyenne* を起草して『人権宣言』に抵抗した人があったぐらいですから、女の存在を表明したいという願望は年季が入っています。その流れには逆らえないはずですよ。

(名古屋大学)

—
[参考文献]

Lyster, R. (2006), "Predictability in French gender attribution: A corpus analysis", *French Language Studies* 16, 69-92.